



マリーン・エンゼル

MARINE ANGEL



社団法人 中部小型船安全協会

名古屋市港区入船2-1-17 名古屋港湾会館5階

TEL 052 653 - 2407

FAX 052 653 - 2414



日本財団
The Nippon Foundation
助成事業

地球温暖化と海洋

気象解説家

島川 甲子三

異常気象に無関心になった

今年（平成15年）は異常気象の夏でした。日本では、梅雨前線が7月の末まで居座り続け、8月の立秋を過ぎてからは秋雨前線に化けて、涼しさと日照不足が不況の足を引っ張り、遂に10年ぶりの大冷夏となりました。

ところが世界的にも、欧州での熱波が当地の平年を10度も飛び越え、フランスで熱症死者が1万人を超えると伝えられ、パリ南部のモンスリー公園に『大木の陰に寄るのは避けて下さい』という張紙が出ました。それは8月11日午前8時前、長さ10mを越す大枝が突然折れ、15mの高さから落下したのです。この大枝の落下事故は、フランスの猛暑の仕業でした。一方アメリカでは竜巻が異

常多発し、インドでも8年ぶりの猛暑で49度、中華民国では大雨洪水または日照り続きの干ばつなど、様々な異常気象のニュースが伝えられました。近年『エルニーニョ現象』で世界中に異常気象が起きると騒がれましたが、平成15年はそんな気配も無かったのです。我国の大冷夏も、昔なら、日本の主食の米不作（凶作という）ことで大騒ぎするほどの大異変です。ところが、米食が肉食化され『米』は余り、農家は減反され続けて、米不作の叫びは萎縮してしまいました。ところで冷夏や熱波や猛暑などは、その始まった時から関心と対策がとられるべきでしたが、そう出来なかつたのが事実です。それは未だに納まらぬ戦禍に気を取られたり、一方では便利で安楽な生活に安住していると、地球環境に異変が起

き始めたことなどは、昔に比べてかなり鈍感になっていると思われるかもしれません。

近代日本は先進国を自認して、快適で便利な生活を求め、大量のエネルギー消費を続けていますが、人を含めた全生物の地球環境に異変が目立ち始めているのです。『猿の捨てたゴミは自然に帰るが、人の捨てたゴミは自然に帰らない』と言われるように、自然に受け入れられないゴミは出さない知恵を育て、自然からの注意信号を守って徐行すべきです。間違っても信号無視や暴走は出来ません。

地球環境の変化と海洋

地球が誕生しておよそ46億年という歴史の中で、極めて最近の400万年前に、人類は誕生しました。そ

の人類の歴史の中でもつい最近の僅か百年間と言つ、極く極く短い間に、異例の大発展を成し遂げたのです。それに伴って、爆発的に増えた人口を養うために、大量生産大量消費が始まりました。そしてそれに必要な膨大なエネルギー消費が、炭酸ガスを代表とする『温室効果ガス』の自然な増加「かつてない急増」をもたらしました。それが地球自然システムのバランスを崩しかけた兆しとして、異常気象の増加が目立ってきたのです。

温室効果ガスとしては、炭酸ガスの他に、水蒸気、オゾン、一酸化二窒素、メタン、フロンなどが挙げられます。このうち水蒸気は大気中に最も大量に含まれますが、常に出入り変化が激しいうえ、地球環境の進化に重要な働きを担ってきました。

太陽系の惑星である地球の兄弟星、水星・金星・火星（大接近中）では、太陽に近い順に原始太陽からの強い太陽風によって、原始大気が吹き飛ばされ、最も太陽に近い水星では、大気も水も無くなっています。

金星や火星では、内部から湧き出したガスが残って大気が出来ましたが、それらの主成分は炭酸ガスでした。そのうち金星では太陽に近過ぎたため、湧き出した炭酸ガスが吹き飛ばされると同時に、水が熱蒸気となつて大量発生し、温室効果が強まりました。それがなお水の蒸発を盛んにして、さらに温室効果が激しくなり、これが繰り返されて「暴走温室効果」となつてしまい、現在の金星の地表温度は460度（90気圧）もある焦熱地獄です。ところが火星は小柄なうえに太陽から遠かったため、炭酸ガスもありましたが、低温のまま水は氷になって、温室効果は少なく、低温で平衡が保たれ、現在の火星の平均地表温度は氷点下50度です。

しかし地球では、水は水蒸気として大気中に含まれて、直ぐに厚い雲ができ、大気は少しづつ冷やされたので、水分は雨となって大量に降り注ぎ、ついに大海原が出来たのです。その原始の海には、原始大気に含まれていた硫黄や塩素の化合物が溶け込んで、原始の海は酸性でした。そして大気中には窒素だけが取り残されました。

雨はどんどん降り続いたので、まだ熱かった地面から溶け込んだカルシウム・ナトリウム・マグネシウムなど金属イオンが流れ込み、古代海水の酸性は徐々に中和されました。そこで大気に含まれていた炭酸ガスは海水に溶け込むようになったのです。海に溶け込んだ炭酸ガスは、海水のカルシウムと結合して炭酸カルシウムになり、珊瑚虫の殻となり、それが長い間に堆積して今ある「石灰岩」が生れたのです。こうして億年単位で海洋に蓄えられた炭酸ガスは、大気中の炭酸ガスの60倍にもなりました。金星や火星に比べて、大気の炭酸ガス濃度はぐん

と少ないのです。やがて今から27億年くらい前、海岸に発生した水中植物が、水と炭酸ガスと日光から酸素を作り出し、その酸素は大気中に蓄えられてゆきました。大気中の酸素濃度が増えると、大気層でオゾン層が出現しました。そのオゾン層は、太陽から降り注ぐ強烈な紫外線を吸収して生まれ育つたので、それ迄、強い紫外線のため海中だけにしか住めなかつた植物物が、陸上にも住める安全な地球環境が培われてきたのです。こうした偶然のチャンスは、太陽の大きさや、太陽から地球までの距離、地球の大きさなどが、水星金星や火星と微妙に違っていたからで、宇宙創造の神の紙一重の差で授かった賜物なのです。

ともかくもこうして今から4億5千万年ほど昔（顕生代古期）を迎えて、海洋の水は塩辛く、陸上にも植物の緑（葉）が繁茂しはじめ、植物がせっせと作ってくれた酸素を呼吸する動物が活躍し始めたのです。オゾン層に守られて、海から上陸した動物のうち、体内の血液が海水の塩

分濃度とよく似ている（人も）のは、決して偶然ではないと言われています。因みに海水魚の体液の塩分濃度は約1.3%ですが、これも人の体液と殆ど同じなのです。そして海水の塩分濃度は約3.5%ですから、海の魚は体内の塩分濃度が海水より薄いので、絶えず水分を取られるか、塩分が体内に入ってくる危険に曝されている（人も同じ）わけです。ところが海の魚は特殊ホルモンの作用で身の安全が保たれています。

海で遭難漂流した時、海水を飲めば死が、降ってくる雨水を飲めば助かるのも、海水の塩分濃度が体液の濃度より約3倍も濃いからです。さて話を本筋に戻して、希な幸運に恵まれて環境が進化してきた地球は、海洋が存在したため、温室効果ガスの炭酸ガスをつまぐ調整して、まず植物が生まれ、その植物が光合成して酸素を作ってくれ、その酸素がオゾン層を生んで、地球生命の繁栄条件が整ったのが、およそ4億5千万年前です。やがて海で進化してきた生命が上

陸に成功したのが4億2千万年前、さらに南半球に一つに纏まっていた巨大大陸が、2億年くらい前から分裂を始めて、現在の大陸分布になった「ウエゲナーの大陸移動説」は、現在のプレート・テクトニクス説で確かなものとなっております。

さて、人類の歴史として見れば、まことに長い350万年ですが、その最後の100年間、即ち人類全歴史の3万5千分の1という短期間に、科学やら戦争やらといった方法や手段を契機として、知恵を駆使した人類は、一種類の生物として破格の進化発展を遂げました。

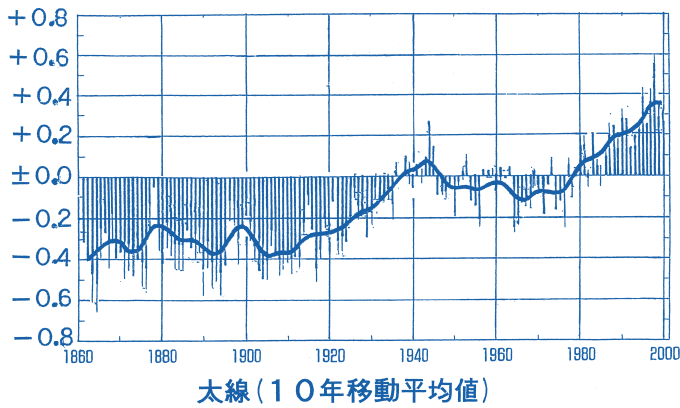
しかしその発展の行く手に、地球温暖化という魔物の影が忍び寄ってきたようです。

いま世界につながる海原に出て、じつと水平線を凝視めるとき、人が生物の頂点に立って、未永く暮らすには、これからどうするのが正しいのか、深く考えさせられるのです。

そこでちょっと図表を見て下さい。

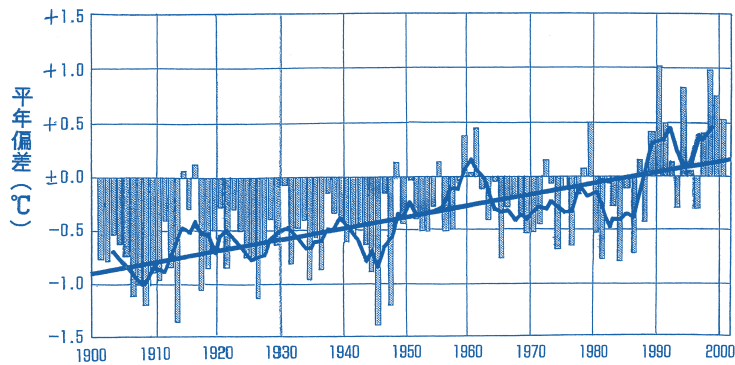
まず第1図は、気候変動に関する

第1図 [ICPP] 全地球年平均気温の傾向



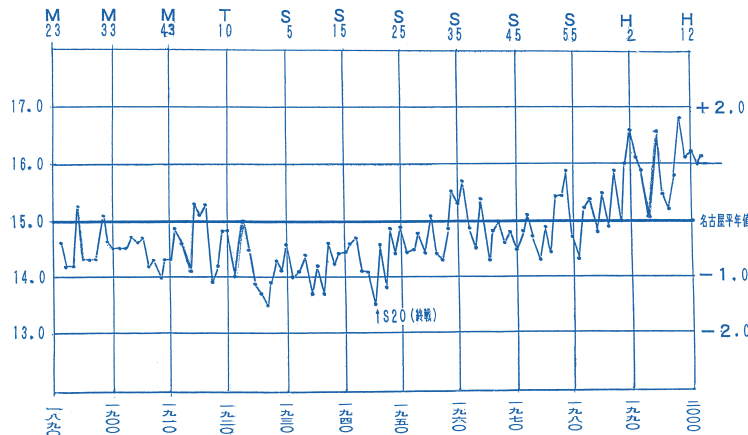
政府間パネル「ICCP」による資料から、全世界の気温変化の大きな変動を見ます。10年の移動平均（太線）を見ますと、1910年頃までの寒冷期が温暖化に向かい、1945年頃から1975年頃までやや寒冷化し、その後は急速な温暖化に向っています。そして二十世紀を概観しますと100年間で約0.7度の昇温になっていきます。

第2図 [A] 全日本の年平均気温の経過 (100年間)



第2図は、北半球の全日本「A」と名古屋「B」では、共に過去100年間で略1度の昇温です。第1図の地球の気温上昇値よりも、北半球の日本の方が昇温が大きいのは、北半球は大陸が多く、南半球は海洋が多いから（比熱の差）です。海洋の多い南半球は暖まりにくく、大陸の多

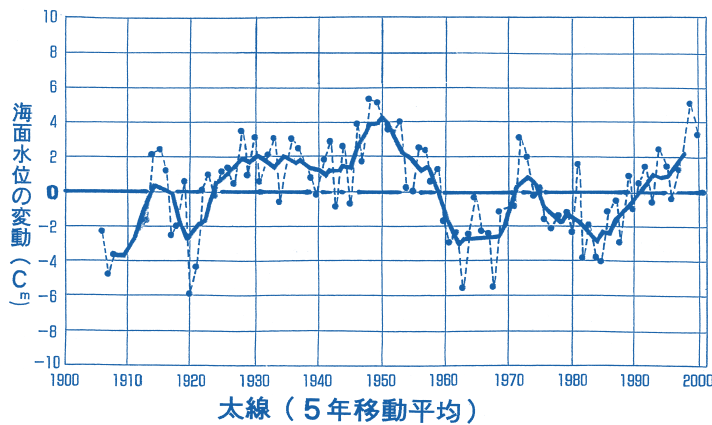
第2図 [B] 名古屋の年平均気温の経過 (111年間)



い北半球の方は暖まり易いので、早く温暖化します。このことは、最近のコンピュータシミュレーションでも確かめられています。

第3図は日本の海面水位の年平均値の変化です。5年移動平均の太線で見ると、約100年間の変動は、1950年のピークにはまだ及びま

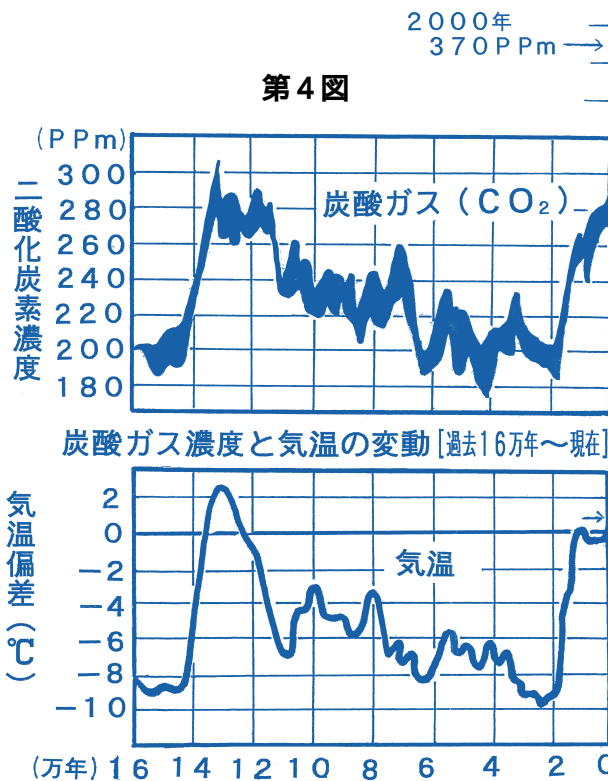
第3図 [気象庁] 日本沿岸五港湾の海面水位の年平均値



せんが、1985年頃から海面の上昇が続いており、やがてピークの1950年に追い付く気配を示しています。

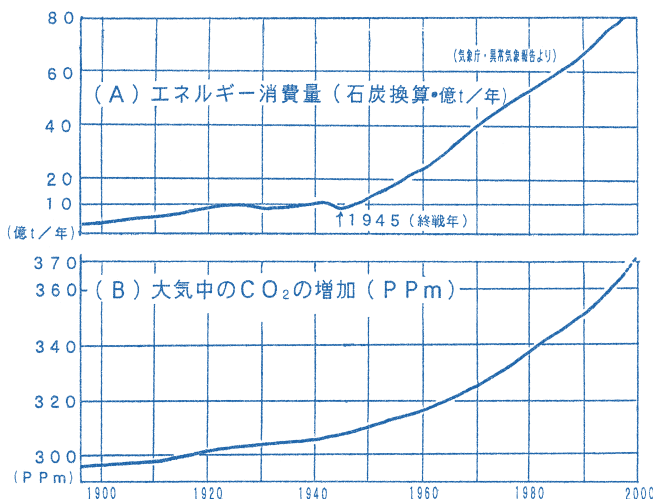
温暖化による海面の上昇は、主として水の膨張によるもので、南極の氷が溶け出す分での水位上昇は、千年くらい先になると見積もられています。

第4図



第4図は、南極の氷原を約2000m深く掘って(棒状のコア)約16万年前から近年までの、氷に閉じ込められていた空気に含まれる炭酸ガス濃度変化と、他の方法で推定した気温変化とを比べたものです。この図では炭酸ガス濃度が、温室効果をもたらして気温を変動させた結果、気温との相関が高く、炭酸ガスの温室効果をよく物語っています。そこで引き続き次の第5図に注目して下

第5図 世界エネルギー消費と炭酸ガス



さい。世界エネルギー消費と炭酸ガスのここ百年間の推移です。第二次世界大戦の終わった後は、石炭から石油への転換に伴う急速なエネルギー消費の増加を示しております。それにほぼ平行して濃度を上げた大気中炭酸ガスは、いまや370PPmを超えて、なお急上昇中です。こんな急上昇をしたことは、第4図の16万年の変化を省みても、その間一度も無かった大異変です。これを念頭に

炭酸ガス濃度の変動と海洋の働き

において、再び第1図から見直して下されば、地球温暖化の魔の陰は、かなりはつきり見えてきます。

人間活動によって大気中への放出が激化している炭酸ガスなど温室効果ガスは、どうなっていくのでしょうか。

地球の大気や水は、全体としてトータルで見れば、地球外へ出入りし

ないので、増えも減りもせず一定です。太陽から放射で受け取る光エネルギーと、夜間の部分などで放射して失うエネルギーは殆ど等しく保たれています。したがって炭酸ガスも、もともと地球に備わったもので、その総量は変わりません。化石燃料（石炭・石油・天然ガス）を使う活動エネルギーで発生する炭酸ガスは、炭素に換算して年間54億トンになります。ところが、このうち33億トンが大気中に残留してPPMを高める結果になっています。では大気中に残らない21億トンの炭酸ガスはどこへ消えるのでしょうか。

それには二つの行方が考えられます。その一つは、陸上植物の光合成が増えることによって、大気中の炭酸ガスがより多く捉えられ、セルロースなどに変化して木の幹に蓄えられます。（燃やせば大気に戻る）しかし、現在の森林は、生育よりも伐採による森林の減少が目立ちます。さらに熱帯雨林の大量伐採で、土壌が日に曝されると、大量の土壌成分の有機物が分解して、炭酸ガスを放

出します。こうした人間の仕業で、陸上の植生は、人間が放出した炭酸ガスを消化しているとはとても考えられません。

その二つ目は、海洋です。地球表面の72%を占める海洋は、炭酸ガスが、海水から大気へ出たり（放出）、大気から海洋へ移ったり（吸収）を繰り返しています。大気と海洋を行き来している炭酸ガスの総量は約900億トンと見積もられています。これまでの研究の結果から、吸収するのと放出する量は、全く等しいのではなくて、大気から海が吸収する炭酸ガスの方が19億トンほど多いという研究結果が出ています。地球システムとして人間にはまことに有り難いことです。さて前述したように54億トン放出したうち33億トンが残留して、消えた筈の21億トンには未だ2億トンが行方不明ですが、この2億トンは陸上の何処かで吸収されている分であろうと考えられています。しかし植生や地表面の激変で未だよく判っていません。

では海洋は、炭酸ガスをどのよう

にして19億トンの炭酸ガスを取り込んでいるかと申しますと、次の三つの場合が判っています。

大気中の炭酸ガスが、海洋の表面から海水中に溶け込むとき、大気と海水のそれぞれに含まれている炭酸ガスの圧力である分圧に差が有りません。大気中の炭酸ガスの分圧は、緯度によって殆ど変りが無いのですが、海水の中の炭酸ガス分圧は、緯度によって変わります。それは、海水の炭酸ガス分圧は、高緯度海域ほど大気中の炭酸ガス分圧に比べて大変低いのです。また逆に、低緯度海域では、海水の炭酸ガス分圧が大気中の炭酸ガス分圧に比べて高い値を示しています。高い所から低い所へ水が流れるように、炭酸ガスも分圧の高い方から低い方へ移動します。従って北半球や南半球ともに高緯度海域では、大気から海水へ炭酸ガスが溶け込み、低緯度海域では海水から大気に向かって炭酸ガスを放出します。そこでこれら各海域の呼吸放出の収支をとると、大気から海洋へ炭酸ガスが溶け込んでいる、すなわち

海は大気から炭酸ガスを呼吸していると考えられます。

海水に溶けた炭酸ガスはカルシウムイオンと結合して炭酸カルシウムとなつて拡散したり沈降します。沈降を助けるものは、プランクトンにより粒子化したり、黄砂（大陸起源の砂塵粒子）と結合して沈降する場合もありますが、それら以外で自然に沈降する場合は、1週間から1年で、海面からせいぜい200m～300mの深さくらい迄です。

植物プランクトンの光合成で炭酸ガスを固定し、有機物の粒子として比較的速く2～3ヶ月で深海底に達する「マリンスノー」としてよく知られています。海洋上層で有機物や炭酸カルシウムとして捉えられた炭酸ガスは、こうして海洋中では速いスピードで海洋底の深海層（8000m）に送り込まれてゆきます。しかし、やがてゆっくりと上昇流に乗って海洋表面に戻り、再び大気中に放出されるのですが、この戻り炭酸ガスの海の旅は、年に4mというスロースピードでおよそ2000年

程かかるのです。すなわち、海洋に溶け込んだ炭酸ガスの行方については、海洋表面と深層水（深海底）との間を、往きは2〜3ヶ月、復元りは約2000年かけて往復していることとなります。

ところで海洋は海面から温められると、軽くなり海面に浮き上がりますから、海が相当荒れていても、なかなか海面下に暖かさが伝わりにくいのです。ですから海面の水温が30度あつても、水深500mになると水温は10度以下となり、1000mも深くなると約4度位に下がります。しかしそれ以上深くなつても水温はあまり大きな変化はありません。それでも、太平洋の4000mから8000mの深さまでの水温は、いつでも1度〜2度で、とても冷たくて真暗な世界です。この低い水温が貯蔵に都合がよく、深層層は余分な炭酸ガスを2000年間貯蔵する倉庫として、黙々と働いてくれているわけです。

だが然し、毎年54億トン出し続けるのは人類です。しかも年々放出量

が増えている、既に年60億トンを超えているとも言われています。炭酸ガスばかりでなく前述の他の温室効果ガスも確実に増え続けていますから、全地球の温暖化は進むでしょう。

温暖化がすすむとどうなるか。陸地を含めて考えてみましょう。炭酸ガスが増えると、陸上植物の炭素同化作用が高まり、植物の成長は促進され、植生による炭酸ガスの吸収が増加します。しかしやがて森林など植生が十分に育つて、成長が頭打ちになる頃、土壌有機物や植物自体の腐敗分解による炭酸ガスの放出量が吸収量を上回るようになります。従つて、温暖化は、或る期間を過ぎれば、結局は陸上の炭酸ガス吸収能力を、自ずから弱めてしまう方に働くので、陸上植生に温暖化の抑制効果を期待するのは無理なようです。では海洋の炭酸ガス吸収能力はどうでしょうか。単に気温が上昇するだけなら、炭酸ガスを減少させてくれます。しかし、前述したように、大気中の炭酸ガス分圧も同時に増加することを考えると、いろいろな過程を

経て結論的には、今世紀中は吸収が放出を上回り、現在の吸収をしばらくは続けてくれそうです。

動植物の母体である海洋

地球が、動植物の住める最適な環境を完成させるのに、常に貢献してきた海は、あらゆる生命の母体です。人が今を生きているのに、関係する自然産品は海陸合わせて1550億トンもあります。その内、動物生産量は陸上が9億トンなのに対して、海洋からは30億トンにもなります。日本の主食「米」の国内生産は約1000万トンですが、海からの漁獲高は約1200万トンもありました。ところが最近では魚介類の不漁と汚染が問題になっています。各国の操業規制はますます強まり、有機水銀やPCBを始めとする魚介類の汚染問題、漁網や船底塗料の有機錫化合物、ダイオキシン汚染等々と、人間が原因である不自然行為が、計り知れない生物環境の破壊を広げて、被害はもろろん人にも及んでいます。

ところが驚くことに、日本の水産

魚介類の輸入は年々増え、我国の原油の輸入額3兆円の半分を超えていて、輸入額では第2番目の高額です。日本の海はもう離れて遠く、住処を汚され追い払われた魚達は泣いています。現代の環境悪化は、ともかく温暖化という魔の影におののくだけで済むものではありません。ヒトという生物が温室効果を高め、強紫外線や放射能や複雑な化学物質に、「特別耐性を持つ生物」だけを残す！という極めて過酷な環境淘汰を強制するのなら、地球自然からの『人類の絶滅』以外に答えはありません。母なる海を大切にします。地球上の命を勝手にカネに変えることは今後はもつしません。どうか人類抹消だけはお許し下さい。神様！

神の答えは決まっているそうです。

出 艇 式

名古屋地区

平成15年7月6日名古屋港ガードン埠頭前面海域において出艇式が実施されました。

本年も同地区出艇式は7月1日から実施されている海難防止強調運動の行事の一つとして実施されました。

式典は名古屋鉄道㈱の女性社員の方に対して、最初に松浦名古屋海上保安部長から「名古屋海上保安部一日部長」の任命が名古屋海上保安部に於いて行なわれた後、名古屋港ガードン埠頭に着岸する「巡視船みずほ」船上に於いて「巡視艇一日船長」「安全パトロール艇一日船長」の任命が実施され、名古屋海上保安部一日部長、(社)中部小型船安全協会

西川会長からそれぞれ任命書が手渡されました。以後、閲艇官(名古屋海上保安部一日部長)の指揮のもとに、参加した安全パトロール艇は船隊を組み名古屋海上保安部所属巡視艇の先導をつけ、整然と船隊を組み勇壮に航走、受閲をつけ無事終了しました。

なお、当日は任命式の会場となった「巡視艇みずほ」は一般公開されていたこともあり、訪れていた多くの市民の注視の中での行事となり、海上安全のために活躍する海上安全指導員と安全パトロール艇を紹介する貴重な機会に恵まれ、有意義な出艇式でありました。

(当日参加艇25艇)



一日船長任命



一日安全保安部長の訓辞



一日海上保安部長等と海上保安部職員



閲艇

蒲郡地区

平成15年7月27日晴れ天候に恵まれた中、出艇式は三河湾蒲郡竹島埠頭西側海岸に於いて実施されました。

出艇式は昨年と同様に「蒲郡ボート天国」の行事の一つとして実施されることとなり蒲郡海上保安署長、第四管区海上保安本部安全課長、(社)中部小型船安全協会副会長のほか、蒲郡市長、ボート天国推進連絡協議会会長等多くの方々のご出席をいただき、この日の為に蒲郡市が一般公募した女性(市内在住の女子高生)の方々に「巡視艇一日船長」「安全パトロール艇一日船長」「一日海上安全指導員」をお願いし、蒲郡海上保安署長、四管本部安全課長、当協会副会長からそれぞれ任命書を授与された後、巡視艇一日船長等の「発動命令」により日頃の操船技術を披露して、パレードを開始、閲艇官の閲艇を受けたのち、さらに舞台を進め折りから竹島埠頭に着岸し一

般公開中の「巡視艇いすず」横を通過、一般市民方々に海上安全指導員及び安全パトロール艇の紹介ができ、意義ある出艇式を無事終了しました。

(当日参加艇17艇)



巡視艇一日船長と行事役員



閲艇



受閲艇(一日船長)

海洋安全教室

平成15年7月23日、8月17日の両日鳥羽湾及び名古屋港において親子で実際の海に親しみながら、体験を通して海のルール、マナーを学習し併せて海事思想を普及する機会として親子海洋安全教室を開催しました。

7月23日 鳥羽湾

一般公募約1000余名の中から抽選で選ばれた親子100名と伊勢市内の身体障害者と保護者の方50名の合計150名が、観光船に乗船して鳥羽港佐田浜桟橋を出港し、湾内のイルカ島に到着、当日は生憎の雨模様の天候で予定していた海浜清掃を中止し、早速用意の弁当を平らげながら島内の散策を楽しみました。帰途では、鳥羽海上保安部の海上

保安官が行う「海の環境の大切さを教える」ための簡単な水質テストを行い、日頃使用している洗剤、食用油等も海の汚染の原因になると知って驚いたりしておりました。また、海上の安全についての話に



水質テスト

聞きいたり、実際に救命胴衣が膨らむのを見てびっくりしたりの楽しく有意義な一日を過ごしました。鳥羽湾で海洋安全教室を開催するのは2回目ですが、例年ですと梅雨も明け好天のもとでのびのびと安全



救命胴衣着装訓練

教室を楽しんでもらう予定でしたが、生憎の天候不順で参加いただいた方には気の毒でありました。



救命胴衣着装訓練

8月25日 名古屋港

一般公募15000余名の中から抽選で選ばれた児童とその保護者100名と名古屋市内の施設の子供達50名が名古屋港ガーデン埠頭から観光船に乗船し、伊勢湾にその姿を現し始めた中部国際空港の近くまでをクルージングを楽しみました。

途中船内では、海上保安官による「海の汚染防止」をわかり易く説明する紙芝居や、ロープの結策教室が開かれ、両手に持ったロープを海上保安官の言つとおり一生懸命操作していましたが、何時の間にか違った結び方になっている児童が多く、保護者が手伝っておりましたが、最後には保護者の方が夢中になっている光景もみられました。特に「もやい結び」には苦勞をしている様子でした。

「平素あまり経験できないことをさせてもらった」との感想が聞かれ、大変有意義な一日でありました。



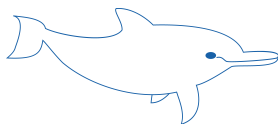
救命胴衣着装訓練



ロープ結索教室



乗船風景



紙芝居

海上安全講習会

平成15年度の教育活動の一環として4月～7月までの間に8箇所において、海上安全講習会を実施し、講習内容については各個所の要望に沿ったものとなりました。

元NHK気象キャスター島川氏による観天望気、天気予報の見方・聞き方・波浪つねりの注意、東海地震の解説講義、

本年6月1日から施行された「改正船舶職員法（船舶職員及び小型船舶操縦者法）」は資格区分の再編、遵守事項の新設等、小型船関係者には直接係わる事柄であるため、非常に関心が高く海事代理氏の方々に改正要点等についてわかり易く解説講義と、地元海上保安部署の担当官から海難事例の紹介とその原因、再発防止の注意事項の講話を受け、受講

者一同は海難事故防止の大切さを再確認しました。



受講風景



受講風景

優良海上安全指導員

”海の日“に表彰受賞

第8回「海の日」に海事関係各分野で功労者、永年勤続者の表彰式が平成15年7月22日行われました。

当協会関係では、優良海上安全指導員として、永年にわたり小型船舶の安全運航、健全で秩序のある海洋性レクリエーションの普及発展にも尽力され、もって海上交通の安全確保に多大の貢献をされた次の方々が海上保安功労者として表彰されました。

(敬称略、順不同)

海上保安庁長官表彰

(尾鷲地区)

寺下 寛 尾鷲市

第四管区海上保安本部長表彰

(四日市地区)

吉田道弘 安芸郡河芸町

(鳥羽地区)

片岡 晃 度会郡南勢町



第四管区海上保安本部長表彰(鳥羽地区)片岡 晃

名古屋海上保安部長表彰

(蒲郡地区)

竹本全秀 西尾市

四日市海上保安部長表彰

(四日市地区)

平岡菊男 安芸郡河

芸町

この度、海上保安庁長官表彰を受章されました「寺下寛」氏は体調がすぐれないことから、本年3月をもって海上安全指導員を退任されました。

同氏は昭和62年6月から海上安全指導員として地元尾鷲市を基点に熊野灘の小型船の安全指導に力を注いでいただいております。

本当に長年にわたるご活躍ごうさまでした、今後も後輩海上安全指導員を蔭らご指導お願い申し上げます。



事務局だより

平成14年度 第3回理事会の開催

平成15年5月22日(木)午後2時から名古屋港湾会館4階第6会議室において理事15名(内委任状提出理事4名)監事2名ご来賓として福原正己第四管区海上保安本部交通部長、他3名の出席のもと平成14年度第3回理事会が開催され、会長挨拶のあと総会提出議案の審議が行われた。

提出議案

第一号議案

平成14年度事業報告及び平成14年度収支決算報告について事務局長が詳細に説明。審議の結果全員異議なく総会提出が承認された。

第二号議案

平成15年度事業計画(案)及び平成15年度収支予算(案)について事務局長が詳細に説明。審議の結果全員異議なく総会提出が承認された。

第三号議案

役員の一部改選(案)について西川議長が配布資料により説明、諮られたと

ころ全員異議なく総会提出が承認された。

第四号議案

定款の一部改正(案)について、事務局長が詳細に説明、審議の結果全員異議なく、総会提出が承認された。

第五号議案

助成金交付申請の件
西川議長が平成16年度の日本財団に提出の助成金申請に伴う事業計画及び収支予算の審議・議決を理事会に委任していただくことについて総会に諮りたい旨説明、審議の結果全員異議なく承認された。

以上をもって全議事の審議を終了した。引き続き来賓の福原正己第四管区海上保安本部交通部長の挨拶があり、午後3時30分終了した。

平成14年度当協会通常総会

平成15年5月22日(木)午後3時30分から名古屋港湾会館3階孔雀の間において、ご来賓として磨 良三第四管区海上保安本部長他3名の方々のご

臨席をいただき開催されました。総会提出議案は、本総会前に開催された平成14年度第3回理事会において提出承認された。

一、第一号議案

- (一) 平成14年度事業報告
- (二) 平成14年度収支決算報告
- (三) 監事の会計書類監査報告

二、第二号議案

- (一) 平成15年度事業計画(案)
- (二) 平成15年度収支予算(案)

三、第三号議案

- (一) 役員一部改選(案)

四、第四号議案

- (一) 定款の一部改正(案)

五、第五号議案

(一) 助成金交付申請の件
で原案どおり承認され、引き続き来賓の磨 良三第四管区海上保安本部長の祝辞をいただき午後4時45分終了した。

本総会は、会員皆様のご理解とご協力によりまして、全議案を原案どおりご承認を賜わり、無事終了いたしましたことをご報告申し上げますとともに厚く御礼申し上げます。平成

15年度の事業につきましては、その推進にあたり事務局として最大限の努力をいたしますので、これが円滑に実施出来ますよう、今後とも皆様方の絶大なるご支援とご協力を賜わりますようお願い申し上げます。

(総会提出議案等の詳細等につきましては、先にお送りしました総会資料及び会員・役員・専門委員名簿のとおりでありますので、本誌の掲載は省略させていただきますのでご了承下さい)

平成14年度通常総会において、原案通り承認をたまりました。「定款の一部改正」につきましては、第四管区海上保安本部長の認可をいただく必要があり、事務局で手続きを進めてまいり6月20日に認可をいただきましたので、同日を施行日として製本をいたし過日会員の皆様にご送付致したとおりであります。

安全パトロール艇ステッカー



【ステッカーの仕様】

ステッカーは円形、大きさは、直径24cmとする。
ステッカーは、青色で縁取りされた円形
白地に海上保安庁のSマークのデザインを施し、
その上に、

SAFETY PATROL BOAT

及び

海上保安庁指定

の文字を上記のとおり、上書きする。

ステッカーの紙質は、屋外における耐水、塩害及び日光に耐えうる材質を採用するものとする。

【表表紙】

左上 名古屋出艇式
右下 親子教室ロープ結索訓練

お知らせ

安全パトロール艇ステッカー

小型船の安全確保のために活躍していた「安全パトロール艇」の関係者から、洋上において活躍中、指名の際貸与された「安全パトロール艇旗」のみでは一般船舶と識別しにくいのではないかと、という声に従前からありました。
この状況を解消する為、この程海上保安庁においては、「海上安全指導

員と安全パトロール艇」にかかわる通達の一部改正を行い、従来指定を受けた安全パトロール艇には「安全パトロール旗」が貸与されておりましたが、今後はこれに加え「安全パトロール艇ステッカー」が海上保安庁から交付されることとなりました。
なお、実施は9月1日となっておりますので間もなく皆様のもとに届くと思っておりますので暫くお待ちください。

目次

地球温暖化と海洋気象解説家	島川 甲子三	2
出艇式		8
海洋安全教室		10
海上安全講習会		12
優良海上安全指導員 「海の日」に表彰受章		13
事務局だより		14
お知らせ		15

会費納入のお願い

会費を納めてない方はお手数ですが、至急御送金下さるようお願いいたします。

現金書留

名古屋港区入船一ノノ十七
名古屋港湾会館5F
(社) 中部小型船安全協会

銀行振込

名古屋銀行 港支店
口座名 (社) 中部小型船安全協会
口座 普通一八四六八三

郵便為替

・0081018222723
加入者名 (社) 中部小型船安全協会

通巻 第72号
平成15年 9月
発行所

社団法人 中部小型船安全協会
名古屋港区入船二丁目1番17号
名古屋港湾会館 5F
〒455-0032
TEL 052 653-2407
FAX 052 653-2414
編集兼発行人 山口 富雄



お知らせ

海の情報提供ボランティア「海守」制度の発足について

「海守」は、インターネットや携帯電話を利用して海に関する情報を提供し、
 各自治体や漁業関係者や関係機関と連携すると、
 海の安全と繁栄を守るためのボランティア組織です。
 私たちの暮らしを支える「青い、平穏な、豊かな海」を、
 ひろくひろくの海でしっかりと守りつづけていく活動の輪に、
 あなたも加わってください。

うみもり
海守
 日本財団
 Nippon Foundation

守ろういっしょに、日本の海。
海の情報提供ボランティア「海守」募集。

【海の緊急連絡は118番へ】
 ＊海守活動はボランティア活動であり、活動参加による責任は一切負いません。海上保安庁が主催する緊急連絡先「118番」への連絡をお願いします。

会員募集の一括申込みについて

会員募集に当たって、参加申込が煩雑となることから一括しての会員申込みの手續きが可能となっております。

参加の意思のある会員におかれまして、まだ申込み手續きを済ませていない方には、当協会事務局が取りまとめて申し込み手續きを行ないますので、その旨を当協会事務局宛連絡頂けますようお願いいたします。

なお、連絡は電話又はFAXにてお願いします。

TEL (052) 653-2407

FAX (052) 653-2414